

あとがき

「人間はカテゴライズされることで個性を發揮する」

—— それは、私が高校時代に所属していた陸上部の顧問の口癖だった。

当時の私は、この「カテゴライズ」という言葉がどうにも好きになれなかつた。人を「変な方向に」個性づけし、型にはめてしまうような響きを感じたからかもしれない。

けれども、いま振り返ってみると、私たちの誰もが何らかの枠組みの中で自分を形づくり、他者との違いの中に「らしさ」を見いだして生きている。

無個性な人間など、そもそも存在しない。

「彼はああいうやつだから」と言えば差別のようにも聞こえるが、「あなたにはあなたにしかない魅力があり、それは神からの贈りものです」と言い換えれば、人は自分の存在を少し誇らしく思える。

カテゴライズとは、時に他者から与えられる枠でありながら、同時に自分の個性を照らす光でもあるのだ。

本書の編集を担当してくれた石井氏にお願いして、私の原稿を三つの章に整理してもらつた。

「イデオロギー」「リテラシー・クリティシズム」「プラクティス」。

こうして自らの文章を他者の視点でカテゴライズしてみると、それぞれの時期に自分が何を考え、どんなことに心を動かされていたのかが、思いのほか鮮やかに浮かび上がつてくる。

前半の「イデオロギー」篇には、難解な理論書に挑んでは挫折し、それでも何かを掴もうともがいていた当時の自分がいる。

一方、後半の「リテラシー・クリティシズム」と「プラクティス」では、思索よりもむしろ日常や感情の搖らぎが筆を動かしており、より等身大の自分の声が聞こえてくる気がする。

カテゴライズは、時に人を縛る。

だが、そこに自分を映し出す鏡としての機能を見いだせば、その枠の中でこそ、自由に息づく個性があるのかもしれない。

この冊子が、こうした“自分を映す試み”として、読者の皆さん的心に何かを響かせる一冊となれば幸いである。

最後に、私の理不尽な要求に答え続けてくれた石井氏に、心からの感謝を伝えます。ありがとうございます。

た。